二〇一五年一月二三日

落椿嵩なすここに不老水　さつき
あい寄りて微動だにせぬ寒の鯉　よし女
老木の寒肥は根より離しやる　有香
結界の奥は竹林笹子鳴く　雅流
緞帳の色も華やぐ初芝居　よう子
木隠れに寒灯ともる喫茶店　三刀

二〇一五年一月二二日

蒼天にレース模様の枯木かな　よし女
園丁の鍬音すれど梅固し　うつぎ
春の水吐き出す手押しポンプかな　有香
彩窓に春日のとどくチャペルかな　はく子
跡形もなしあれほどの実南天　三刀
険競ふメタセコイアの大枯木　菜々

二〇一五年一月二一日

寄せ返す波は千鳥の足洗ふ　よし女
だし巻の芯に地産の明太子　明日香
春よ来いとて川面うつ石たたき　菜々
玉の日を纏ひ蝋梅透けにけり　満天

二〇一五年一月二〇日

岩垂れて鋼のごとく滝凍つる　菜々
親子句碑訪ねし杜の四温かな　菜々
タイガース優勝祈願絵馬の春　満天
折鶴のごとくに折れし葱きざむ　あさこ

二〇一五年一月一九日

錫杖の列粛粛と音冴ゆる　宏虎
舞降りて四温の鳩は胸反らす　菜々
鶴頸に一茎よろし寒椿　満天
糸寒天白波のごと乾きけり　うつぎ

二〇一五年一月一八日

岸壁を這い上がりくる冬怒涛　さつき
蓬餅頬ばりながらティータイム　つくし
新年会となりは女子会らしきかな　はく子
病院の夜間受付冴え返る　かず
里山をけぶらすべしや大とんど　うつぎ

二〇一五年一月一七日

着脹れて吾子の駅伝応援す　さつき

毎日句会みのる選・二〇一五年一月二五日